テムチルト・ショブチョード（席海明）氏への書簡

親愛なる兄弟テムチルト・ショブチョード様、

私たちは、南モンゴルの民族問題および政治的将来について、最近あなたが示された見解に関してお便りする南モンゴル人の一団です。あなたが過去30年以上にわたり、中国からの完全な政治的独立と600万人の南モンゴル人の福祉のために尽力されてきたことに、私たちは深く感謝し、尊敬の念を抱いております。あなたの言動は、南モンゴル人だけでなく、チベット人、ウイグル人、そして世界中の自由を愛する多くの人々にとっても、大きな励ましとなってきました。

しかし、ここ数年、あなたの政治的見解には南モンゴル内外の独立支持者たちを落胆させる傾向が見られるようになりました。それは中国当局にとっても、南モンゴルの独立や民族自決を訴える勇敢な人々、たとえばハダ氏やホーチンフー女史のような方々を弾圧するための口実を与えることになっています。世界中や南モンゴルの人々自身の間でも、独立は不可能と考えられてきたことも事実です。しかし南モンゴルは、その見過ごされがちな内なる力、強固な民族的アイデンティティ、深い歴史意識のおかげで、中国の支配から自らを解放し得る新たな勢力として浮上しています。これは、最近中国国内で行われた平和的抗議運動にも見られました。また、ハダ氏やその家族、ホーチンフー女史が中国の刑務所制度や警察機構に立ち向かって勝ち取った精神的・道義的勝利、シリンゴルなどでの学生や牧民たちの勇敢な行動は、南モンゴル人が「不可能を可能にする」可能性を有していることを示しています。

このような希望に満ちた歴史的瞬間において、あなたが最近発表した「モンゴル・中国二元所有論」および「中国の民主化は南モンゴル民族問題解決の前提条件である」といった理論は、私たちの士気を著しく損ねています。これらの理論は、中国からの自由を望む南モンゴル人の意思と願望を代表するものではありません。さらに憂慮すべきは、これらの理論が、南モンゴルの歴史において最も暗い30年間において民族自決の希望を保ち続けるためにあなたが払ってきた多大な努力を無にする可能性があることです。

以下、あなたが最近展開された二つの理論について詳しく検討いたします：

1.「モンゴル・中国二元所有論（二元所有論）」について

「モンゴル・中国二元所有論」（「両元主体論」とも呼ばれる）は、中国語の多くのニュースメディアに登場し、実際には中国共産党のそれよりもさらに閉鎖的で、さらに人種差別的で、さらに排外的な「海外中国民主活動家」と呼ばれる人々の多くに熱狂的に歓迎されています。あなたの「モンゴル・中国二元所有論」の主な考えは、南モンゴルはモンゴル人と中国人の両方の故郷であり、両者は南モンゴルの正当な所有者であるべ

きだというものです。モンゴル人と中国人が共存のために相互利益と相互補助の関係にあると主張するこの理論は、中国による占領によって南モンゴル人が受けている苦難の緊急性を強調し、優先することに失敗しているだけでなく、先住民族の祖先の土地における所有権の正当性を保障する国連「先住民族の権利に関する宣言」（UNDRIP）の正当性を否定しています。中国の権威主義体制下にある少数民族区域自治法でさえ、名目上にすぎないとしても、少なくとも原則的には南モンゴルの主要な所有者としてモンゴル人を認めています。現在の中国政権のいかなる中国人も、南モンゴル出身のテムチルト・ショブチョード氏のように、この正当性をこれほどまでに公然と否定する者はいません。海外の南モンゴル人知識人たちは、「モンゴル・中国二元所有論」を、中国共産党の顧問でもあった中国の著名な御用学者である費孝通氏が確立した、他の先住民族やいわゆる「国内の少数民族」に対する中国の政治的抑圧、領土占領、文化抹殺の理論的枠組みである「中華民族多元一体論」の派生物、あるいは不器用に盗用した模倣コピーだと見なしています。多くの南モンゴル人は、この「モンゴル・中国二元所有論」を受け入れがたい譲歩の度合いだと考えています。これを中国政権への服従と同一視する人もいれば、「南モンゴル民族への裏切り」と呼ぶ人さえいます。

2.「中国の民主化は南モンゴル民族問題解決の前提条件である」理論について

最近、あなたは「中国の民主化は南モンゴルの民族問題解決の前提条件である」と題するもう一つの理論を表明されました。この理論は、海外の中国語メディアで何度も取り上げられています。名前からも明らかなように、この理論は「少数民族問題」と呼ばれる問題は、中国が民主化される前には解決できないというものです。私たちは皆、中国の「少数民族問題」、少なくとも南モンゴル民族問題は、中国の植民地主義的占領に対する闘いだと考えています。私たち南モンゴル人は、親愛なる兄弟であるあなたを除いて、自分たちの民族と領土を占領する中国人が、どのような形や名称で現れるのかには、正直なところあまり関心がありません。彼らが共産党の中国人であろうと、国民党の中国人であろうと、民主主義の中国人であろうと、リベラルであれ保守的であれ、それは南モンゴル人にとって主要な関心事ではないのです。実際、あなたもご存知の通り、世界には「民主主義を広める」や「民主的変革をもたらす」という名目で他国を占領している国が少なくありません。私たちは、中国共産党政権の崩壊が中国の民主化と同義ではないことをはっきり認識しなければなりません。社会正義、平等、人権、人間の尊厳といった民主主義に不可欠な要素に対する中国人の根深い忌避の精神的態度のせいで、中国社会には民主主義が根付く土壌がそもそも存在しないのです。中国社会をよく観察してみれば、国民は極度に分断され、社会は深刻に分裂し、腐敗は蔓延しており、いかなる革命も民主主義に結びつく可能性はほとんどありません。むしろ、現在の政権崩壊後には無政府状態、混乱、さらには内戦が続く可能性の方が高いのです。文化大革命は、中国人が社会的・政治的変化にどのように反応するかを示す典型的な例で

す。最近の中国市民と中国共産党の機動隊や武装警察との暴力的な衝突は、正義の社会への健全な変化の兆しをまったく示すものではなく、むしろ暴力と対立への最も可能性の高い道筋を暗示しています。親愛なる兄弟よ、私たちは、いわゆる「海外中国民主活動家」たちが社会変革を目指しているのではなく、単なる政権交代を目指していることを認めなければなりません。彼らが望んでいるのは、自分たちが共産党政権を打倒し、あらゆる勢力を動員して（南モンゴル人を含む）、自分たちの新たな政権を「民主主義」の名の下に打ち立てることです。将来のいわゆる「民主主義的中国」の下でも、私たちは結局のところ中国の植民地であり続けるでしょう。彼らに私たちを救うことを期待するのはやめましょう。すべての中国人「民主主義活動家」は、南モンゴル問題を「中華民族」という枠組みの中でしか見ていません。この意味では、私たちはこれらの中国人「民主活動家」よりも毛沢東に評価を与えざるを得ません。なぜなら、毛沢東は1935年に「南モンゴル人が自決、さらには中国からの完全独立を享受する権利がある」と約束したからです。今日のいかなる中国人「民主主義活動家」にも、南モンゴルの自決権と独立を、表面上であれ認める「誠実さ」や「寛容さ」は見られません。ノーベル平和賞受賞者の劉暁波を含むいかなる「民主的」な中国人も、この民主主義の初歩的な試験すら合格する精神的準備がないのです。私たちは、あなたがなぜ「民主主義」の名を冠したこの一派の中国人が、「共産主義」の名を冠した他の一派の中国人より優れていると信じるに至ったのか、全く理解に苦しんでいます。私たちにとっては、中国の体制転換、つまり「民主化」と呼ばれるかもしれないものが、南モンゴルの自決の前提条件でも保証でもないことは、極めて明白なのです。

これら二つの理論は、南モンゴルにとって最善の利益に資するものではありません。むしろ、それらがしたことといえば、中国人の「民主主義者」や共産主義者の双方に、南モンゴル人が「中華民族の一部であることを受け入れ、分離主義の考えを放棄する」という認識を与え、彼らを一斉に安堵させる結果となっています。私たちにとって同様に憂慮すべきは、あなたが他の南モンゴルの自由の戦士たちと一切協議することなく、これらの理論を公に発表したことです。それにもかかわらず、私たちの中の一部とのやり取りの中で、あなたはこれらの主張を弁護し、二つの無効かつ非論理的な正当化を持ち出しました。それは次の通りです：

1. 「私は30年間、南モンゴルの独立を叫び続けてきた。しかし誰も私の呼びかけに応えず、南モンゴルには何も起こらなかった。」だからといって、私たちの国を占領している者たちをそのまま「所有者」、或いは「主人」、として認めれば、突然世界中があなたを支持し始め、南モンゴルが一夜にして独立するということにはなりません。むしろ、この時点で独立を放棄することは、敵を増長させ、いかなる対話の可能性もさらに遠ざける結果になります。南モンゴルの独立運動が実を結ばなかったことについて、あなたを一方的に非難するのは不公平ですが、あなたが率いてきた組織をより良く運営し、成果を上げることができなかったという点については、一定の責任を自ら取るべきです。私たちの運動が一般の南モンゴルの人々と密接に結びつくような戦略的計画が欠けていたために、支持を得られず、成果が出なかったのです。決して、「自決」や「独立」という理

念そのものに欠陥があるわけではありません。独立という考えを放棄したからといって、未来の成功が保証されるわけでは決してありません。

2. 「南モンゴルにいる2000万の中国人をどうするのか？何らかの提案を考えなければならない」という主張についてです。誰も、私たちがこれら中国人占領者の扱いについて、今すぐ最終的な解決策を出さなければならないと強制しているわけではありません。そもそも、私たち自身が彼らによって受けた苦しみを解決する前に、なぜこれら侵略者の幸福のために私たちが責任を負わなければならないのでしょうか？なぜ、私たちの国と民族を犠牲にしてまで、これら招かれざる中国人侵略者を満足させる義務が私たちにあるのでしょうか？人類の希望と慈悲の象徴であるダライ・ラマ法王ですら、チベットにおける中国人占領者問題について具体的な提案をしていません。ウイグル人の母でありノーベル平和賞候補者でもあるラビア・カーディル女史でさえ、東トルキスタンにおける中国人侵略者の権利と福祉をどう保証するかについては一切言及していません。なぜ南モンゴル人だけが、ただ中国人を宥めるためのこのような提案を出さなければならないのでしょうか？

私たちはあなたに、これらの理論を撤回し、かつて30年間保持してきた信念に立ち返っていただくことを心から願っております。もしそれが難しい場合には、少なくとも南モンゴル人の意思に一致する立場を新たに築いていただきたいのです。そして、どうしてもこれらの理論を堅持されるのであれば、南モンゴルを代表するのではなく、ご自身個人の見解として述べていただくよう強くお願い申し上げます。

敬具

署名：アメリカ合衆国、カナダ、日本、スウェーデン、ノルウェーおよびモンゴル在住の南モンゴル人一同

2011年11月2日